

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

十字架の七言 ——マルコ伝第15章20～39節——

小池辰雄
1965年4月11日

異端の首 自己義認が罪 靈的な罪 「彼らを赦し給え」（第一言）「今日なんじは我と偕にバラダイスに在るべし」（第二言）絶対無条件の救済 「なんじの子なり。なんじの母なり」（第三言）「なんぞ我を棄て給いし」（第四言）絶対矛盾の叫び 絶対無条件降伏 「われ渴く」（第五言）「わがこと終りぬ」（第六言）「わが靈を御手にゆだぬ」（第七言）

【マルコ15・20～39】

²⁰かく嘲弄してのち、紫色の衣を剥ぎ、故の衣を著せ十字架につけんとて曳き出せり。²¹時にアレキサンデルとルポスとの父シモンというクレネ人、田舎より来りて通りかかりしに、強いてイエスの十字架を負わせ、²²イエスをゴルゴタ、釈けば髑髏されこうべという処に連れ往けり。²³斯て没薬を混ぜたる葡萄酒を与えたれど、受け給わず。²⁴彼らイエスを十字架につけ、而して誰が何を取るべきと、髑髏くじを引きて其の衣を分かつ、²⁵イエスを十字架につけしは、朝の九時頃なりき。²⁶その罪標には『ユダヤ人の王』と記せり。²⁷イエスと共に二人の強盜を十字架につけ、一人をその右に、一人をその左に置く。²⁸「なし」²⁹往来の者どもイエスを譏り、首を振りて言う『ああ宮を毀こぼちて三日のうちに建つる者よ、³⁰十字架より下りて己を救え』³¹祭司長らも亦同じく学者らと共に嘲弄して互いに言う『人を救いて、己を救うこと能わず、³²イスラエルの王キリスト、いま十字架より下りよかし、然らば我ら見て信ぜん』共に十字架につけられたる者どもも、イエスを罵りたり。

³³昼の十二時に、地のうえあまねく暗くなりて、三時に及ぶ。³⁴三時にイエス大声に『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と呼り給う。之を釈けばわが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし、との意なり。³⁵傍らに立つ者のうち或る人々、これを聞きて言う『視よ、エリヤを呼ぶなり』³⁶一人はしり往きて、海綿に酸すき葡萄酒を含ませて葦あしにつけ、イエスに飲ましめて言う『待て、エリヤ來りて、彼を下ろすや否や、我ら之を見ん』³⁷イエス大声を出して息絶え給う。³⁸聖所の幕、上より下まで裂けて一つとなりたり。³⁹イエスに向かいて立てる百卒長、かかる様にて息絶え給いしを見て言う『實にこの人



●異端の首

十字架につく前の、いろいろなきさつることは省きました、もっぱら十字架に焦点を結んで、マルコ伝15章20節から読みます。

これがマルコ伝の十字架の一番焦点の記事です。ナザレのイエス、人を愛し、またすべて悩める者、泣く者、苦しめる者、病める者を慰め、これを癒し助けた。こういう人が、なぜ十字架に架けられたのだろうか。全くこれは言語道断なことです。その一番の張本人たちは実は宗教家たちであった。また、学者もやはり——学者と言つても、モーセの律法に詳しい学者で、結局、宗教的な部類の人たちです——宗教人がイエスを迫害した。いわば宗派争いのこときもの。

宗教の世界で一番醜いものは、この宗派争いです。これは東西いたるところにあつて、日本の仏教においてもあつたし、キリスト教においてもそのために血を流した歴史がある。30年戦争なんでものも起こつた。カトリックとプロテstantの争いでもあつた。そういうことを考えると、一体、宗教なんてのは實にいやらしいと、一般の人がそれで敬遠してまうという、原因の一つでもあろうかと思います。しかも、

「自分たちは正統派、オーソドックスである」

と言うご連中が、何か創造的な本当の深い真理に立つ人たちをみな異端視して迫害してきたということが、宗教史において、キリスト教においても仏教においても、歴史を見るとよく見られるところです。

その最たるもののがこのイエス・キリストであつた。

「異端の首」

といえば、イエス・キリストは実にユダヤ教に対するところの異端の首であつた。ところが実は、このユダヤ教および預言者の宗教、預言者および祭司の宗教の一番の深い根本的な行じ者である。本当の改革者であり、また本当の行じ者である。

これが読めないわけですね。それは結局、その宗派の正統と自ら任ずる者たちが、己を義としているわけです。要するに、宗教的な争いというものはみな、自己義認で他を排斥している。パリサイ根性というものが大かれ少なかれ働いて、そういうことになる。パリサイ的ないわゆる自分の熱心、自分の確信、そういうことが宗教の世界では一番あります。信頼が強くなればなるほど、その危険性はまた非常に強い。

ところが、イエスという方は、これ以上の信仰者はないわけです。非常に強い信仰をもつておられる。けれども、彼はおよそそういうパリサイ根性とは正反対である。信仰といふものに対して一般のクリスチヤンは、

「キリスト、キリスト」



と言うけれども、そこを本当に見なかつたらば、いくら聖書の研究をしても、いくら教会通いをして、これは本筋には行けないというわけです。

●自己義認が罪

人間の「罪」と言いましても、ただ観念的に罪ということではなくて、具体的に、彼らの罪の一一番最たるものは、この自己義認が罪である。一応立派なんですよ、自己義認者は。

「律法の義につきては責むべきところなし」

と、サウロ（パウロの前身）は立派であつた。ユダヤ教に対して非常に忠実であつて立派であつた。何か非常にけしからんことをいろいろ、いわゆる罪というようなことを彼はしたわけではない。非常に立派で自己が義しいと思っているから、とうとう最後には、ステパノを殺すようここまで、やはり、宗教的な迫害をやつた。老若男女を捕まえては、牢屋に引っ張つていくような役割までやつている。これは熱心、神に対するわが熱心というやつです。

キリストを十字架につけたことの、人間の罪の一番恐ろしいものは、そういう一つの道徳的宗教的な、意志的な、むしろ靈的な罪である。それが人をもあろうに、最大の弟子パウロがそうであった。これはなんと不思議なことであるか。彼自身が、

「我は罪びとの首かしらである」

と告白し、自分の義を

「塵芥ちりあくた」

と自ら言つた。キリストを得たることのゆえに、これを塵芥とみなした。それだけに、これほどはつきりした黒と白との、光と闇との転換をした人がない。パウロがなるほどキリストの十字架を一番深くつかまえたということは、彼がそのような意味において、最大の罪を犯したということであつて、パウロは絶対無条件にキリストの前に降参した。

私は今度、京都で5月の終りに（1965年5月29～30日）、

「無条件降伏」「中央突破」「決定的勝利」

という三つの題目を掲げて、3回にわたつて講演をいたします。まるで、戦争の題目みたいだな、無条件降伏の、中央突破の、決定的勝利のという。

そういう無条件降伏をパウロは十字架の前に——いや実に彼は告白だけではない。告白どころではない——彼は本当に無条件降伏を事実、ダマスコ途上でさせられてしまつた。どうにもならんですね、ぶつ倒されてしまつて。もう目が見えず、耳が聞こえず、口がきけずと、こういう始末ですから。

「お前はとんでもない間違いだ。私の十字架に対しての逆らいである！」

と。とうとうキリストは、もう原子力どころではない、靈力爆弾をパウロにくらわしてしまう。



キリストの十字架は深い一つの、意味ではなくて事実なんです。よく、「聖書解釈学」なんて、一生懸命で釈議を問題にしている。釈議をどうのこうのということではない。事実なんです。事実をもつてキリストは、文句なしの世界に入れたわけです。このことはなにもパウロに限らない。実際に、パウロの告白は直ちに私たち自身の告白です。キリストの前に、

「汝の目の中の梁木を取り除け」ということ。私は性格的にいえば、パウロとはだいぶ違う人間だけれども、もちろん小さな人物ですけれども、パウロのその告白はよくわかるわけです。

●「彼らを赦し給え」（第一言）

「十字架上の七言」と、いつかもこんな題でお話したかと思いますけれども、まず第一に発せられた言葉としては、ルカ伝23章33節あたりから読みますと、

〔33〕髑髏（されこつろ）という処に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、一人をその左に十字架につく。³⁴斯くてイエス言い給う『父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり』（ルカ23・33～34）

さきほど、司会者が神さまとの会話のお話をされました。そのお話はまことに然りアーメンです。しかも、私はどうも皆さんとの会話が少ないらしいので、まことに耳が痛い面がある。私は、しかし、会話は皆さんといくらでもしたいんですよ。どうか、いつでもつかまえてお話してください。いつ来てもいいですよ。

「先生は忙しいから遠慮しよう」

なんて、そんな遠慮はいらん。来れば、30分や1時間くらいのうちなら、いつでもお相手します。それから1時間延長して、自分の仕事をすることは何でもないですから。一昨日はほとんど3時間くらいしか寝てない。

「父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり」

と。お父さんに向かつて、「父よ」と呼んだ。これは、今の自然科学の世界で育つている方々にはむずかしいですよね、「父よ」というようなことを呼ぶのが。

「神さまを『父よ』なんて言つたつて、どういうことか」

と。認識的に考えたら、それはわからんですよ、「父よ」なんて。それは認識の世界ではないんだから。

「それでは、仏教に仏さんの像があるが、キリスト教も、『父よ』というなら何かお父さんみたいな像を造つたらよかろう」

なんて。ところが、そんなものは一つもない。偶像を造つてはいかんとある。全く靈であり、しかもそれを「父」と呼ぶ。これはもう絶対に解明のつかないことです。「父」という言葉で信頼し呼びかけるほか、キリストは仕方がなかつた。人間は肉の身をもつてゐるね。こういう親子の関係が一番深い。一番地上で深い関係は親子の関係です。この頃はだいぶ薄



いような面もあるけれども、実は本当は薄くはない。また、聖書では、神さまとイスラエルの関係を夫妻、夫婦の関係として、ホセヤなんていうのはそれを示されたわけです。とにかく、非常に深い人格的な関係です。

そこで、キリストは「父よ」と一言呼ぶときに、もう一切であるわけです。
「父よ、彼らを赦してやつてください」と。「自分が彼らを赦す」とはキリストは言われない。

「父よ、彼らを赦し給え。その為すところを知らないのであるから。私に対しうどんでもない間違ったことをしているが、どうか、赦してやつてください」と。神の子としての深い自覚であり、また、父に

「赦してやつてください」

と執成しておられる。これは、その言葉自身がもう大祭司の言葉です。キリストを

「大祭司」

と言うのはそういうことです。

祭司は人を執成して、神との平和の交わりの世界に、喜びの世界に入れる。元来、祭司宗教というものは非常に大事なものをもつてているんですが、それがいわゆる坊さん宗教に、いわゆる戒律宗教になってしまったものだから、「祭司」という言葉が非常にいわゆる坊主臭いようなことですけれども。本当の祭司は——預言者は実に自由に神さまから選ばれているのだが——祭司というものの本質はそういういた職業的なものではない。エレミヤという預言者は祭司の子です。けれども、彼の中には深い意味における祭司的な面と預言者の的な面と両方あります。非常に愛の人ですから。

先ず第一に、罪の赦しをキリストはここで神に乞われる。自分の十字架というものをもつて人間を贖罪する。

「赦してやつてください」

というのは、傍観して言っているのではない。単なる同情で言っているのではない。事実、自分が身代わりになつて人間の罪を引き受けているから、

「彼らを赦してやつてください」

というこの願いが、この祈りが本当の願いであり、本当の祈りである。実力のある祈りです。自分がそこに身を置いているから。

私たちの祈りはすべてそういう提身的な、そこに身を置いている、その場においての祈りでなければ、その祈りは力とならない。本当に達せられない。自分をそこに挺していの祈りは必ずきかれるわけです。傍観的な体裁のいい、いわゆる同情といったような、そういうことをではない。その身を棄てての祈りです。

「⁴まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。」



このイザヤ書53章はまるでキリストの十字架を見てものを言つてゐるような、驚くべき預言者の書です。

⁵彼はわれらの^{とが}憲のために傷^{きずつ}けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから^{こうしめ}懲罰^{こうしめ}をうけてわれらに平安^{やすぎ}をあたう。そのうたれし痍^{きず}によりてわれらは癒されたり。（イザヤ53・4～5）

私が「碎けの神学」なんて言つたのは、この碎けに始まつてゐる。

「われらの不義のために碎かれ、みずから^{こうしめ}懲罰^{こうしめ}をうけ」

という。自ら碎かれつつ、十字架で裂かれつつ、血を流しつつ、生命を屠りつつ、獻げつつ、

「父よ、彼らを赦してやつてください」と。

「これは贖罪の死ですから」

なんて、そんな説明は彼はなさらない。事実が語つてゐる。

「十字架の言」

というのは、十字架という事実が語つてゐる言葉以上の言葉がそれです。

皆さんは、私たちは、語りつつまた聞きつつ、その現実に入つていかなくては。私はこれを語りつつ、途中でもう語るのがおそらくかなわない氣持になりそうです。壇上でなんかで語られる事柄ではないんだから。私たちはただこの十字架のところに来たら、平伏して読まなくてはいられない。呑気な安閑としたような氣持でここのこところが読めたら、それは冒瀆です。

「彼らイエスの衣を分かつてくじ取りにせり」（ルカ23・34）

「衣を分かつて云々」というのは詩篇22篇にそんなことが書いてあるものだから、その通りにやつてゐるわけです。詩篇22篇というのは、ひとつの中の十字架の言葉がそこに出でてゐる。

「わが神わが神なんぞ我をすてたもうや。何なれば遠くはなれて我をすぐわざ、わが歎きのこえをきき給わざるか。……」

という言葉に始まつて、18節にくじを引くことが書いてあるでしょ。

¹⁸かれらたがいにわが衣をわかつ我がしたぎを^{くじ}にす。¹⁹エホバよ遠くはなれ居たもうなけれ。わが力よねがわくは速^{とく}きたりてわれを^{たす}援けたまえ。」（詩篇22・1：19）

と。おそらく、イエスは期せずして、22篇のこの最初の言葉およびその内容がサツと来ておられたと思います。

その前に、ちよつと引用するのを忘れましたが、

²⁶その罪標には『ユダヤ人の王』と記せり。

とある。これは

「INRY」



という罪標の文字です。「I」ではなく、これは「J」ですけれども。

「イエスース・ナタレーヌス・レックス・ユーデーオールム」

という。

「ナザレのイエス、ユダヤの王」

という字です。これはラテン語とギリシア語とヘブライ語の三つで書かれてあつたという。ギリシア語では

「ホ・バシレイウス・トーン・ユーデオン」

という言葉です。そういう嘲りの罪標の下でもつて語られているわけです。

そういうわけで、第一言は、深い執成しの贖罪の愛の言葉がまず第一に発せられた。

●「今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」（第二三言）

順序は必ずしもはつきりしませんけれども、二番目に普通考えられているのはルカ伝23章43節の言葉です。右か左かわからんけれども、一方の十字架にかかつっていた盜賊が言つた。
 「³⁹十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを讐りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』⁴⁰他の者これに答え禁めて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。⁴¹我らは為しし事の報を受くるなれば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為さざりき』⁴²また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶えなまえ』

「憶う」というのは「アナムネオー」という字です。プラトンの哲学に
 「アナムネーシス」「憶い出し」

というのがある。天界を地界から、本当の故里を憶うという。魂の故里に帰るわけです。

⁴³イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』（ルカ23・39～43）

「今日なんじは我と偕にパラダイスに在る」

と。これは、キリストの発せられたる言葉のうちで私は大好きなものの一つです。彼らは宗教的自己義認者である。またその手下ども一味の者たちに、

「みんな間違っている。為すところを知らない」

と言つて、敵のために、自分を極刑に処した者たちのために赦しの祈りをされた。

今度は、自分たちが極刑に処せられているところの、そして生涯が本当にいわゆる悪いことを散々した二人の盜賊が非常に対照的です。片一方は、人生の最後の一瞬に

「悪かつた。せめても憶えていただきたい」

と言つた。

「自分はもうしようがない」

と言つて、放蕩息子と同じように、あれよりももつと深刻に。これはもう息を引き取ると



きだから、ルカ伝15章以上に深刻な場面です。そうしたらば、まつ先に、「なんじ我と共にパラダイスに、仮天国に入る」と言われた。

今、私は「仮天国」と言いました。「仮天国と仮地獄」です。新しい方もいらっしゃるから、私の図表をお示しします。『無教会神学論』という本の中に書いてある。

これはこの世、悪の世です。「悪の幕屋」というのはこの世のこと。この世の君、サタンが君臨している。ここにキリストの十字架がある。けれども、その中に本当の幕屋がある。キリストに従っているところの「聖霊の幕屋」があるわけです。教会というものは本来みんなそういうものです。永遠の世界から、天地創造から神の国に向かつて、神の時が流れている。

「御国を来らせたまえ」

という祈りは、時をこちらに縮めようとしている線ですから。狭き門、十字架を通して引っこり返ると、これがパラダイスの世界です。そして最後に、一番の悲願は、この世そのものが全部、天国に変わること。この三角形は合同でなくてはいかん。けれども、現実はそうならんですよ。万人救済がキリストの悲願です。歴史がだんだん進んでいくて、ある時にこれが歴史の終り、最後の審判の時がくる。そうすると、このパラダイスに入っている人たち——幾人の人か知らないけれども——それが今度はそつちに入していく。これが本当の天国だ。新天新地、神の国です。仮地獄はここに大きく開いている。ここは地獄、「ゲヘナ」です。このゲヘナは「第二の死」を通して、今度はこつちの世界に入していく。そんなように私は考えたわけです。

●絶対無条件の救済

「天界に私と一緒に入っていく」

という。これは絶対無条件の救済です。贖罪から、本当のその次の世界に救われていく。救済ということが、この十字架の第二言でもって、第一の言葉でもって、この盗賊に向かつて言われた。

「あんな野郎は」

とみんなに思われているのが、どつこい一番先に天国に入ってしまった。だから、

「誰が天国に入るか？」

なんていうことは、人が人の品定めは絶対にできないということです。

「あの人に行くだろう」

と思つてゐるのが、

「どつこい、待て！」

ということになつたり、



「あんなやつが？」

と思っているのが行つてみたり。それは神さまだけがなされることで、これは人には分かりません。キリスト教を信じていたから入るわけでもなければ、マホメット教であるから入らないわけでもない。私はそういうた宗派的な品定めは大嫌いです。神さまは人間を見るのに、そんなレッテルでなんか絶対にご覧にならない。大きな目と大きな深い判断をもつて、端倪すべからざる審判をなさる。我々の側には、平伏しの碎けの態勢の他に何もない。

そこが本当に自分の何ものかに絶する、無の世界だということです。「無教会」の無くらいなものではない。私はどうしようかと思って考えたけれども、やはり今度の『曠愛新書』第3号には『無教会神学論』を載せることにしました。読んでみると、やっぱり変わりない。これは本当にそこから、そこを突き抜けて、私がここに火花しているものはもつと燃えている世界だからね。どうしても仕方がない。皆さん、「神学論」なんていうと、

「神学は頭のことだ」

なんて思つたら、とんでもない間違いだ。今度出たら、じっくり読んでいただきたい。

「今日、なんじは我と共にパラダイスに在るべし」

と。こんなうれしい言葉はないじやないですか。私の墓標にはこの言葉を記してもらうよ。

「汝、今日われと共にパラダイスに在る」

と。今度は、「在るべし」ではなくて、「在る」ということです。私たちの信仰の現実は、

「今日、なんじ我と共にパラダイスを行く」

のである。地上を歩いているのだが、そこはパラダイスである。

「私が居るところは、そこはパラダイスである」

と。これは何も最後の言葉ではない。我々の毎日毎日のキリストの恩寵の言葉です。

「でも、私はまだこうですから」

なんてことは言わせないんです、キリストは。無条件です。十字架上の盗賊がそのようにして入つたではないですか。

「大事なのは唯だ一つだ。碎けの心だ」

と。自分を本当に無としている。何ものでもない。無者としている。

「無者こそありがたい。賜りたる無者であるぞ」

と言つて、本当の無者震いをもつて進んで行かなくては。

そうでしょ。この集会の方々が、今くすぶつたような顔してないだろうな。くすぶつていたらダメですよ。うれしいんだか、悲しいんだか、何だかわからないような、皆さんはそういうことではないと私は思っていますがね。もつともつと、

「何とまあ、生命に、喜びに満ちているか」

ということではなくては。ある人が私の手を見て、あなたはもの凄い生命力を持つていると言つた。手相でも何でもないけれども。生命力が与えられているわけです。



今日はここに花があるが、本当に生き生きと青々としている。また、今日は桜が満開で、桜のような日曜日です。福音を受けとっている人が、

「今の自分の身辺にどういう問題があろうが、自分がどんなに今行き詰まりでいろ

いろなことであろうが、何だ」

と。だから、私は「中央突破」と言う。そんなことで挫けるようなことだつたら、

「もう、信仰はやめた方がいい」

と申し上げているとおりなんです。本当ですよ。

イエス・キリストというひとをこの福音書で見てごらんなさい。また、書簡でパウロというひとを見てごらんなさい。まあ何と、何よりも彼らは本当に生命にあふれて、喜びにあふれているではないか。神さまが本当に彼らを貫いているではないか。あなた方は一騎当千です。東京中どこを搜してもいよいよクリスチヤンでいてください。

「そうです、あなたと一緒に私は今日、パラダイスを歩いているようなものです」

と。これは本当に突き抜けた魂になれば、はつきり言えるんです。宗派根性で何のかんのとやつていううちはダメです。何でもみんな包摶してしまう。「幕屋」なんていつても、この幕屋には垣根なんかないんだ。誰だつて入つてきている。誰が入つてきて、どんな道場破りをしようとしたつて、これは破れません。それはもう始めから破れているんだから。始めから

「破れ幕屋」

と称うんだ。どうも不思議なことになつてしまつた、こんなやつが。その私の気合をとりそこなつて、若い青年が、やれ

「先生はこうだああだ」

と言つて、いい加減なところで幕屋を去つていく。私は氣の毒でしようがない。何を見ているのか。何を聞いているのかと思つてしまつ。どうか、皆さん、私を貫いている一番大事なものをグツと、

「そうだ！」

と共感して進んでいただきたい。

●「なんじの子なり。なんじの母なり」（第二三回）

それから今度は、ヨハネ伝19章26節のところで、

「²⁵さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。²⁶イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、視よ、なんじの子なり』²⁷また弟子に言いたもう『視よ、なんじの母なり』この時より、その弟子かれを己が家に接けたり。」（ヨハネ19・25～27）



マリヤに、

「おんなよ、視よ、なんじの子なり」

と、弟子ヨハネを指してこう言われた。また、ヨハネに、

「視よ、なんじの母なり」

と言われた。人間イエスの本当に美わしい心が表れた。

「お母さん、我なんじと何の関わりあらん」

なんて、カナの婚宴では言い放つたようなキリストが、

「これはお前の子だよ。これはお前の母だよ。親しく暮らしていくてくれよ」

と。本当に神族関係をそこに展開した。皆さんも、これは兄弟姉妹であり、またお母さんと娘であり、また靈の父、また子というような、そういう親しい関係が我々の間には、天國的な関係というものが地上の関係の他にあるわけです。それが

「エクレシア」

という、

「呼ばれたる者たち、召されたる者の群」

という——「召団」と藤井先生が言つたが——

「召されたる団体」

という、聖書的な言葉で私が「幕屋」と言いだしたのはそういうわけです。本当にそういつた親しさですよね。この世の秩序は秩序。また天的な交わりの世界は交わりの世界。そこがゴタゴタにならないでちゃんとといけるんです。

そういう真のエクレシアの内実を、神の民の神族の、神の家族の事態をキリストはここで言われた。洗礼のヨハネは、あれは血筋の上からいつても親戚関係になるんでしょうけれども、このヨハネはそうではない。これが第三番目の言葉で、即ち、エクレシア的な本当に親しい交わりの世界。また、本当のざつくばらんな会話の世界ということです。

●「なんぞ我を棄て給いし」（第四言）

四番目が、有名な先程の詩篇22篇の、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

という言葉です。これはマタイ伝とマルコ伝に書いてあって、ルカ伝にはない。マタイ伝27章46節、マルコ伝15章34節です。

〔⁴⁶三時ごろイエス大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言い給う。^{こころ}わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いしとの意なり〕（マタイ²⁷・⁴⁶）

〔³⁴三時にイエス大声に『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と呼び給う。^{よばわ}之を稼けば、わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし、との意なり〕（マル

コ15・34）



「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」（マタイ）

「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」（マルコ）

という。「エロイ」というのはアラミ語的な言い方です。マルコ伝は即ち、一番アラミ語的なキリストの言葉をそのままもつてきました。ヘブライ語では「エリ」です。「エリ、エリ、ラシマ、サバクタニ」という。

「わが神、わが神（エリ、エリ）、なんぞ（ランマ）、我を（ニー）棄てたまいし」という。

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

と。これは一体、何をキリストは呼ばれたか。それは神の義です。

あるべからざることが起きた。キリストを十字架に架けるなんていうことは、そもそもあるべからざることはです。世の中で一番あるべからざることはキリストの十字架である。であるから、キリストは神の聖なる憤りと同じものをここに発せられた。人間の罪は罰せられて、地獄行きであり、第二の死、滅亡で――

「罪の価は死なり」

という。默示録の終りの方に

「第一の死」

という言葉がありますが――それでもうお終いになつてしまふ。ダンテの『地獄篇』の地獄は仮地獄です。最後の地獄は何だか分からぬ。

神の義が通らない。神の秩序が破られた。この罪の世には別な法則が働くなければ、罪の世は滅びてしまう。その別な法則が即ち贖いの法則である。贖罪の法則が働いて担われているわけです。神の法則が直線的に進んでいけば、それは審判で滅びである。預言者アモスが、

「どんなところに逃げたって、神さまは追求して滅ぼしてしまうぞ」と、烈しい言葉をもつて神の義を宣言しました。

「けれども、神にお前たちが今のうちに立ち返るならば、救われる」とは、もちろんアモスも言つてますけれども。

「立ち返らざるかぎり、神の義は徹底的に滅亡をもたらすぞ」と言う。徹底的な愛と徹底的な義です。この義の面が仏教にないとは言いませんけれども――何と言いますかね、その働きと言いますが、役割と言いますか――それがあるところで、大慈大悲に変わってしまうんです。けれども、福音の世界では、義は貫いている。この義と愛の間に十字架が立つているわけです。

この愛も直線的な愛ではない。義があるところの愛である。この十字架があるから、

「神の義は福音のうちに現れた」

とパウロが言つたのはそのことです。「神の義は福音のうちに現れた」というのは、この義



は審判の義であると同時に、恩寵の義、に変わる。与える義と変わるわけです。

このことに気がついたのが、ルターの宗教改革の、ルターの胸の中です。

「自分は責められて、キリストの前にどうにもならん。もうこれ以上、自分は修道僧としての生活をしても、本当の平安も喜びも生命もない。どうしたらいいか。

キリストの義が恐ろしい。ところが、キリストの義は与える義であつた」

「義人は信仰によつて生きる。信仰によつて義とされる。義を与えられる」ということに彼は気がついて、そこに宗教改革が起きた。

「義人は信仰によつて生きる。信仰によつて義とされる。義を与えられる」というパウロの言葉が初めてルターに響いてきた。

「私の義ではない。イエス・キリストの義でなければ、どうにもなりません」というわけです。この義は天地を貫いているところの脊椎骨です。その神の意志の貫くところに自分を完全に置いて、

「汝の御意を、汝の義を、汝の愛を成らしめたまえ」

と祈る。直線的に私たちを神さまは愛してくださつているんだけれども、それではどうにもならない。義というものをそこに含んでいる愛でなければ。

北森さんが「神の痛みの神学」なんてことを言いだしたのはそこのところの消息を言つてゐる。しかし、痛みだけではいかん。キリストを中心にして、我々の救いがキリストであるならば、キリストは痛みのひとではない。

彼は碎けの人である。キリストは十字架の碎けにおいて初めて私たちに本当の愛と本当の義を与えたんだなさつた。その実質は何かというと、今度は、聖霊の問題になつてくるわけです。

●絶対矛盾の叫び

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

というイエスの言葉は神の義を主張するところの訴えです。神の義を完全に行じ、御意を完全にしとげたキリストである。

「なぜ、この義が立たないんですか」

という、絶対矛盾の叫びです。

「赦せ」

という言葉と、この

「なんぞ棄てたまひし」

というのは絶対矛盾の中にある。それは十字架においてだけ語られるところの、十字架においてだけ呼ばれるところの絶対矛盾である。この絶対矛盾を十字架が一つにしてしまつた。それでなくては、この叫びは空しくなつて、单なる人の恨みの叫びになつてしまふ。そうではない。



それはパウロがロマ書3章で言つてゐる有名な言葉が表してゐるとおりです。ロマ書3章25、26節のところはパウロ神学の中心です。21節から、

²¹然るに今や律法の外に神の義は顯れたり、

律法の義ではない。神の義が顯れた。

これ律法と預言者とに由りて^{あかし}証せられ、²²イエス・キリストを信ずるに由りて

受けとることによつて、

凡て信する者に与えたもう神の義なり。

この「神の義」を私たちに、神の前に本当に平伏すときに、無条件に与えてくださる。己の義ではない。だから、自己義認のパリサイ根性から完全にぬけてしまう。我は何ものにもあらずと。神の義を私するのではない。神の義は恩寵です。

「我は何ものにもあらず」

ということです。だから、人を審くことがなくなつてしまふわけです。審くのではなく、今度は大きく人を容れてしまふ。

決定的勝利ということは実は、一切包摶のことなんです。一切を包摶することが決定的勝利です。私はむしろ「一切包摶」と書かなかつた。戦闘的な言葉で書いておいた。

「キリストの中に入ると、一切を包摶する」

という、何とも言えないことになつてしまふから。人にどう言われても何ともない。

「どうもお氣の毒ですね」

と。本當ですよ、私は力んで言つているのでも何でもない。

之には何等の差別あることなし。²³凡ての人、罪を犯したれば神の榮光を受くるに足らず、²⁴功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪^{あがなひ}によりて義とせられるるなり。

ここには「信仰によりて」とは書いてない。

「キリストの贖罪によつて義とされる」

と。「それを受けとることによつて」ということであつて、「信仰によりて」ということを無教会が——無教会に限らない——プロテスタントが

「信仰によつて義とされる」

ということをあまり前面に出しすぎてしまつて困る。実は、

「キリストの贖罪によつて義とされる。贖いによつて義とされる」

ということです。

²⁵即ち神は忍耐をもて過來しかたの罪を見遁^{みのが}し給いしが、己の義を顯さんと

て、キリストを立て、その血によりて信仰によれる宥^{なだめ}の供物^{そなえもの}となし給えり。²⁶これ今おのれの義を顯して、自ら義たらん為、またイエスを信ずる者を義



とし給わん為なり。

● 絶対無条件降伏

神さま自身が義たらんためです。それは十字架において、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

というところに、神自らの義が顯れている。しかもその義は審きつつ赦してしまった。審きつつ救つてしまふ。十字架を通して審きつつ救つてしまふ。審き

だから、神の審きは恐ろしくないですよ。神の審判は、審判のための審判ではない。神

さまの前に

「無条件に参つた！」

と言うときに、初めて本当の救いがそこに来るんです。

²⁷然らば誇るところ何処にあるか、既に除かれたり、何の律法に由りてか、

行為の律法か、然らず、信仰の律法に由りてなり。

信仰という新しい法則によつてだぞと。

²⁸我らは思う、人の義とせらるるは、律法の行為によらず、信仰に由るなり。

「信仰にのみ因る」と、ルターは「のみ」を付けたわけです。

²⁹神はただユダヤ人のみの神なるか、また異邦人の神ならずや、

差別はない。絶対無差別だと。

然り、また異邦人の神なり。³⁰神は唯一にして割礼ある者を信仰によりて義

とし、割礼なき者をも信仰によりて義とし給えばなり。」（ロマ3・21～30）

教会に属するも属さないも、カトリックであろうとプロテstantトであろうと、何であろうと、そんな人間の側の相対的な差別は一切ないとパウロはちゃんと言つてゐるんだ。はつきりしている。パウロの中には深い深い、おのずから深い神学が——神学という言葉がおかしいけれども——神学的法則が、神の法則がちゃんと自ずから言われている。天衣無縫的な言葉です。

これが即ち、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と言つて、神の義が貫かれて、その義が与えられるという、キリストのこの叫びの中に、私たちはこの叫びの下にもう絶対無条件降伏です。聖書が分かるの分からぬのではない。そんなことを言つてゐるときではない。

● 「われ渴く」（第五言）

五番目の言葉とされているのは——何も順序はどうでもいいですよ——ヨハネ伝19章の、

「われ渴く」



という言葉です。キリストは血を流して——血を流すと渴く。手術をなさつた方は分かるでしょ、あとで非常に喉が渴く。盲腸の手術でもそうでしょ、私は盲腸の手術をしたことはないけれども——血を流しておられるから、非常に渴いておられる。「われ渴く」と言う。私たちはこの渴きにおいて、

「義に飢え渴く者は幸いなり。その人は飽くことを得ん」

という言葉を思う。キリストは血を流して、血に渴いている。

「血は即ち生命のあるところ」

と、創世記9章に書いてある。だから、

「この血を飲め、この肉を食らえ」

と言われたのはそのわけです。私たちに与える生命です。

「これは私が流す血だ。これは私が裂かれるところの肉だぞ」と、最後の晚餐がそれです。イエスは十字架上で肉を槍で裂かれたり、血を流したりする。それを晚餐のところで先ず予表的に仰つたわけです。

「それを靈的に受けよ。私は^{いたずら}犬死するのではないぞ。私の中にあるこの靈的な血と靈的な肉を食らい、私自身を『わが血の血、わが肉の肉』とせよ」ということです。それで私たちがそれを靈的に受けとるならば、その生命力は本当にどんなことがあつても、その内側から出てくる。

〔神癒〕

とか何とか言つてるが、何も神癒なんてことを言う必要はない。あなた方自身の中に既に神癒的な働きがこの信の世界では來てゐる。どうぞ、本当の生命力は肉体的現象の奥にいつも無条件に受けとられるということを喜んで受けて進んでいただきたい。

●「わがこと終りぬ」（第六言）

第六番目に、

「わがこと終りぬ」

と言われた。

「これで私の仕事は終わつた。贖罪は完了した」

と。終わつて、そして今度は、本当にまた始まるわけです。

「事の終りは始めなり」

という言葉があるけれども、キリストの終りは今度はまた本当の始まりが——終りのあとで静かな暫くの時があつた——それからイエス・キリストは復活しました。

復活は、息が吹き返したということではない。キリストに宿つていたところの神の靈的生命が、今まで肉のキリストに宿つていた以上の輝かしさをもつて、光体をもつて、光の身体をもつて、変貌のキリスト以上であるわけです。



ところが、マタイ²⁷章50節、マルコ伝15章37節、ルカ伝23章46節に、

〔⁵⁰イエス再び大声に呼わりて息絶えたもう〕（マタイ²⁷・50）

〔³⁷イエス大声を出して息絶え給う〕（マルコ¹⁵・37）

〔⁴⁶イエス大声に呼わりて言いたもう『父よ、わが靈を御手にゆだぬ』〕（ルカ²³・46）

とある。大声に呼ばわる。マタイ伝とマルコ伝は内容が書いてない。ルカ伝の言葉は、

「大声に呼わりて言いたもう」

という言い方は、呼ばわったことがそういう言葉であるか、呼ばわったあとでかく言い給うたか、どうもそのあとの方の気持であつたのではないかと思います。この場合の事実としては、

「大声に呼んだ」

ということと、あとで

「父よ、わが靈を御手にゆだぬ」

と言つたのとあるが、これを特別に大声で呼ぶというのはちょっとおかしい。むしろこれは親しくキリストは神さまに言われたと私はとりたい。大声に呼ばわったのは何だかわからない。もはや絶言の言葉です。絶言の言といふ。即ち絶叫です。靈言的なものです。異言靈言的なものがこの「大声で呼ばわる」ということ。そうしたら、何が起きたかといふと、

〔³⁸聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり〕（マルコ¹⁵・38）

という。聖所と至聖所との間の幕屋の幕が二つに切れてしまつた。これはもはや旧約宗教は要らんということです。旧約宗教はアウフヘーベンした。旧約の宗教はこの私の贖罪の死をもつて、大祭司が羔羊を屠ることは要らんと。イエス・キリストは自らが大祭司であり、自らが羔羊こひつじですから。旧約宗教のそんな儀式的なことは全部、本当の実質をもつて成したから、いわゆる旧約的な幕屋はお終いだということです。今度は、本当にキリストの新しい幕屋、聖靈の幕屋であるということになるわけです。これが二つに裂けたといふのは、正に私はそうであつたと端的に信じます。

●「わが靈を御手にゆだぬ」（第七言）

むしろ、十字架の七言の、その意味のある言葉は、「父よ、わが靈を御手にゆだぬ」という、この言葉が第七番目でしょう。これは詩篇31篇5節に、

〔⁵われ靈魂をなんじの手にゆだぬ。エホバまことの神よ、なんじはわれを贖いたまえり〕

という素晴らしい祈りの文句がある。

「あなたは私を贖つてくださつたから、もう私は一切あなたにお任せです」と。それは、任せて傍観しているのではない。



「あなたにお任せして、ただあなたの力と生命と御言で行きます」

と、これが「委ねる」ということです。委ねるということは、ただこつちはのほんとうことではない。「信頼」という言葉が、ヘタすると、ちょっとそんなような具合に響いたりするといかん。委ねる世界は、祈りの世界ですから。祈りを通さないで、「委ねる」なんて言つてみたつて、それは始まらない。それ自身がもう既に祈りなんですから。そして、神の示しに従つて、自由自在に動く。

これは最後の言葉であると同時に、委ねてキリストは本当の信頼と同時に、今度は本当の希望がそこに生ずるわけです。信頼と希望です。

「さあ、これから私の靈は天界へ行つて、それからあなたと一緒に今までよりも、もっと凄い展開をいたしましよう。ペンテコステを通してから、地の涯までも世の末までもあなたと一緒に働きましょう」

というのがこの「委ねます」という言葉の信頼にして希望である。

十字架の言葉の中には愛と義と信と望とがある。信・望・愛・義を、それから先程の神族的なエクレシア的なものを、何と不思議なものをおのづから含んでいはしないかと思う。そして、わけの分からぬいあの

〔大声〕

というのが、もう説明ができない——この七つの言葉をひつくるめてしまえば——一つの大聲である。一つの靈言であつて、これは分からぬい。私はそう思います。

そのような具合にして、イエスは十字架上において、今までの実存の最後のもの凄い総くくりをおのづから為し給うた。実存の裏付けをもつて、最後の十字架を——私たちが

〔十字架の七言〕

と言うならば、それだけのまたそれ以上の角度をもつて質をもつて——これを捕まえて、そして復活のキリストにでつくわざなくてはいかん。それはもう、それだけつかめば、復活のキリストにでつくわざざるを得なくなつてきます。終わります。

